

## 中国で失われ日本に現存する中国医書

### —内閣文庫所蔵本の分析—

真柳 誠・王 鉄策

江戸時代、幕府は長崎で舶来書を優先的に購入し、紅葉山文庫に収蔵していた。江戸医学館も中国医書を積極的に蒐集し、昌平坂学問所が所蔵した中国書も膨大だった。さらに各地の有力大名や民間でも中国書を多数蒐集していた。そこで日本・中国・欧米の蔵書目録調査と実地の比較調査を重ねた結果、これまで以下の一八機関に中国散佚古医籍を見出した。

国立公文書館内閣文庫二〇六部・一五〇書目、宮内庁書陵部一八部・一八書目、武田科学振興財団杏雨書屋一〇部・一〇書目、龍谷大学大宮図書館七部五書目、京都大学附属図書館四部・四書目、九州大学医学図書館四部・四書目、前田育徳会尊経閣文庫三部・三書目、米・Princeton 大学 The Gest Oriental 図書館三部・三書目、大阪府立図書館二部・二書目、国立国会図書館一部・一書目、東北大学附属図書館一部・一書目、西尾市教育委員会岩瀬文庫一部・一書目、名古屋市蓬左文庫一部・一書目、静嘉堂文庫一部・一書目、米・Harvard 大学 Yenching 図書館一部・一書目、仏・Paris 国立図書館一部・一書目、英・Oxford 大学 Bodleian 図書館一部・一書目、独・Wolfenbuttel 市図書館一部・一書目。

総計で二六六部におよぶが、圧倒的多数は日本にあり、し

かも全体の約八〇%が国立公文書館内閣文庫(以下、内閣文庫と略称)の蔵書である。当然、まず最初に内閣文庫の蔵書を分析しなければならぬ。

内閣文庫には清代までに著された一六三二部・一一五九一冊の医葉書が所蔵され、うち同一版本・写本の重複を除いた書目数では九五六種になる。大多数は来歴が判明しており、江戸医学館・紅葉山文庫・昌平坂学問所・毛利高標の旧蔵書だけで全体の九四%、一五三四部を占める。この内閣文庫所蔵の中国散佚古医籍を分析した結果、以下の結論が得られた。

(一) 内閣文庫本の中国佚書二〇六部は、江戸医学館本一二八部、紅葉山文庫本四四部、紅葉山文庫に献上された毛利高標本二一部、昌平坂学問所本八部、由来不詳本四部、林家本一部で、幕府機関の旧蔵書が圧倒的だった。

(二) 二〇六部が著された年代は宋・金元・明・清に分布していたが、明代の書が一九九部と高比率を占めていた。隋唐以前の書でかつて中国で散佚していた書もあるが、すでに注目されて中国に還流している。

(三) 二〇六部には元版・明版・清版・清写本・朝鮮版・室町写本・江戸刊本・江戸写本の相違があった。宋版と室町刊本がなく、朝鮮版・元版・室町写本が各数部しかないのは、かつて宮内庁へ移管されたことによる。各比率では江戸写本九一部と明版八六部が高率で、両者で全体の八六%を占めていた。

(四) 中国佚書の江戸刊本は一一書目あり、うち五書は明

代の書が集中的に和刻された江戸前期の刊行だった。また江戸中期に刊行された六書は当時から珍本・孤本としての価値が認められて和刻された可能性が考えられた。

(五) 二〇六部中の江戸写本九一部では、江戸医学館本が七九部に及ぶ。うち多紀氏の手跋本と自筆本は元堅一〇部、元簡五部、元胤四部、元昕二部だった。また江戸医学館本の江戸写本中、刊本からの転写では一五部が紅葉山本、一一部が毛利本に基づくと認められた。彼らが貴重書を研究利用する目的で写本を作製したため、二〇六部のうち江戸写本のみが宋・清の各時代にわたっていると考えられた。

(六) 二〇六部のうち明代に著された書が一四九部、また明版が八六部と高率なのは、

江戸時代の蒐書ゆえ、時代が重なる明清代に著された書や明版・清版が当然多く、しかも幕府機関が蒐集・保管したのでほぼ全体が内閣文庫に伝承された。中国ではとりわけ医書について江戸医学館に相当する政府機関がなかったため、後世に評価や復刻がなされなかった医書、とくに明代までの書が佚書となったが、清代の書は数多く伝承されていた。この双方の事情により、内閣文庫に伝承された中国佚書の大多数が明代の書、ないし明版の比率が高いと理解された。

(七) 内閣文庫の中国散佚古医籍二〇六部・二五〇書目は、重複を除く少なからぬ書が世界に一点しか存在が知られていない孤本である。それらの貴重性は歴史的にも高く評価されねばならない。またほぼすべてが江戸幕府機関の旧蔵書で、

さらに江戸医学館の旧蔵書が過半を占める。その蒐集と保存に努めた多紀元簡・元胤・元堅らの功績はきわめて大きい。

(平成九年五月例会)

## 血液循環論前史(2)

藤倉 一郎

先に報告したイブン・ナフィスについての論文が発表されるまで、ハーベイ以前の血液循環理論はセルベートスを嚆矢とすると考えられていた。

### セルベートスの個人史

セルベートスは一五〇九年、スペイン、アラゴン州、ヴィラノヴァに生まれた。十三歳でサラゴツサの大学に入学し、ラテン語、ギリシャ語、ヘブライ語を学んだ。のちに法律を学ぶためにツールズの大学に入学した。十五・十六歳で法律よりも神学に興味がむいていった。そのほか彼はエラスムスの影響をうけ、歴史、地理にも興味をもっていた。

ツールズの大学生活を中止すると、かれはカール五世の懺悔僧クインタナの秘書に招かれた。

一五二九年カール五世の戴冠式にポロニヤまでいき、法王に会った。法王が群衆の上に高く座している光景をみて憤慨した。この頃は免罪符が盛んに売買されていた。彼はキリスト教的背景を有する正直な自由思想家であった。ローマ教